HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本旧石器研究における「北海道」の両義性 : 大陸からの伝播経路か一国史内の辺境か
Author(s)	長沼, 正樹
Citation	, 1, 30-33 加藤博文, 高倉純(編)(2007). 北方圏の考古学 I 北海道大学大学院文学研究科 pp.30-33.
Issue Date	2007-04-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65812
Type	bookchapter
File Information	naganuma2007.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Archaeology in Northern Region, I

北方圏の考古学 I

北海道大学大学院文学研究科
Hokkaido University
Graduate School of Letters

Chapter 3　日本旧石器研究における「北海道」の両義性

―大陸からの伝播経路か―国史内の辺境か―

長沼正樹（明治大学校地内遺跡調査団）

1．はじめに

現代の日本国の姿を前提にその政治経済の中心である本州の立ち位置から見ると、北海道の地政的位置はあたかも開発の遅れた北の辺境に見える。一方で考古学の旧石器研究で北海道は、大陸に由来する新文化や新技術が日本列島に次々と波及した経路、北の窓口ないし文化変化の最先端地としての姿をあらわす。しかし、ともに同じ視線のコインの裏表―本州を日本国の中心、北海道を日本国の辺境とする空間的意識、研究者も含む現代人の社会的価値観の現れ方の違いにすぎない。小稿の目的は、このような学的言説空間の配置を批判的に自覚し、旧石器研究において北海道と本州とを比較する際の問題点を整理することにある。それぞれの論点について解決を示すことはできないが、今後の方向を模索するための覚書である。

2．大陸からの伝播経路としての北海道

人類が現生類人猿との共通祖先から分岐・進化した過程が、すべて日本列島の内部で進行した証拠はない。日本列島に最初に居住した人類は大陸から移住してきたはずである。更新世の人類活動[1]を扱う旧石器時代の研究では、他時代の考古学研究よりも相対的に大陸との関係が重視されてきた。だがその重視とは、本州中心史観に立つ考古学が自らの由来を探る目的で北海道と本州との関連に注目し、この文脈の中で北海道を研究の対象とする構図である。本州島の石刃の出現はシベリア起源とする系統観が論じられ（大井 1965）[2]、近年でも本州島の後期旧石器時代後半期の砂川石器群と杉久保石器群の成立を、北海道集団の影響とした説もある（須藤 2006）。本州島の石器群の由来を北海道に求める枠組みは細石刃石器群に顕著で（芹沢 1961、上野・加藤 1973、栗島 1993、加藤 1997 ほか多数）、さらに細石刃以後の段階でも神子柴石器群（栗島 1999 ほか多数）や「いわゆる縄文草創期」（山内・佐藤 1962 ほか多数）など、逐一枚挙できないほど多くの研究の前提となってきた。北海道と本州島の人工遺物に共通ないし類似する要素を認め、これを北海道から本州という方向のベクトルで文化的影響や人類の移動などとみなす論法である。この言説空間の中で逆方向、つまり本州島から北海道へのベクトルが提起されることは稀といえる。湧別技法（三宅ほか 1980）や神子柴石器群（安斎 2003）を本州島起源とする説は、違和感をもって迎えられるか、定説への意欲的な挑戦と受け止められる。

だがこの前提には二つの疑問がある。第一に、北海道と本州島で内容が共通する旧石器資料が実際に存在するとしても、「北海道が起源地で本州島が伝播先」との確定には、北海道のほうが確実に古いと年代学的に証明する必要がある。石器の形態形成には刃部再生や石材運用など多様な因子が想定されるため、型式学編年だけでは石器資料の同時性や時間差を厳密に捉えることはできない。堆積物や遺跡の自然的形成過程を踏まえた理化学的年代測定が必要となる。測定試料と人工遺物や堆積物との関係が信頼に足る測定例が蓄積されることで、仮に多数の事例で明確に本州が古く北海道が若い事象があれば、本州から北海道へとのベクトルが正当に評価される場合もあろう。先に例示した湧別技法と神子柴文化については、いずれも現状ではそのような蓄積は達成されていない。今後の蓄積に期待される。

第二に生態学的適応の観点からの疑問もある。現在でも北海道と本州以南では、気温や降水量、植生や動物相など自然環境が異なる。環境資源への高度な適応が想定できる狩猟採集社会では、北海道と本州島では人類の自然環境への適応戦略が異なった可能性がある。異なる自然環境への

進出と再適応の点では、本州島から北海道へのベクトルが成立しにくいのと同じ程度に、北海道から本州へという動きも成立しにくいはずである。北海道と本州に共通した考古資料には、それを許容ないし促進した生態学的条件を想定しなければならない。一例として詳細な復元は困難ながら、おそらく温暖期と寒冷期の気温変動などを想定できる。比較的温暖とされるステージ3にほぼ相当する時期には、本州島の台形様石器と類似した石器群が、北海道に展開していたとの指摘がある（佐藤 2003）。これは温暖期には本州島と同様の適応戦略が北海道でも可能であったこと、ひいては旧石器時代でも本州島の集団が北海道に北上した可能性を示唆する。旧石器時代とはいえ一様に寒冷なわけではない。縄文時代前期や現在など温暖期には本州的な人類文化が北海道に定着することを考えると、この想定に無理があるとは思えない。むろん具体的な環境変化とその年代は、個別小地域ごとの実際の事例で詳細に確認する必要がある。

3．日本考古学内部の一地域としての北海道

北海道に所在する遺跡・遺物も、日本考古学の一部として研究されてきた。日本における近代学問としての考古学は本州の研究・教育機関で確立し、そこで訓練をうけた研究者が北海道に赴く形で学術的な考古学研究が開始・展開した。北海道出身の研究者でも、本州の研究機関が出版した書籍も読み、本州で育った研究者とも議論をまじえて研究をおこなう。日本語による記述、本州と同じ手法で資料を分析する等々が暗黙の前提となる。旧石器研究も例外ではない。日本国・日本史を前提とする日本考古学が扱う「地域」の一つとしての北海道、「時代」の一つとしての旧石器という位置づけで研究が遂行・蓄積されている[3)]。これは個別研究者の自覚や意図とは別の問題である。

ここに根をもつ問題もある。一例として旧石器終末段階の編年研究をあげる。一般にある地域の研究開始直後には、すでに研究が進展している別地域を参照して編年案を試行する段階が避けられない。やがて当該地域の内部で資料蓄積が進むと、その地域独自の編年を目指す段階にたどりつく。かつて北海道でも本州島の編年に整合する形に資料を配列した。典型的に表れているのは、旧石器時代の終末期に細石刃・細石刃核を伴わない有茎尖頭器の段階を設定するか否かの問題である。本州編年と整合させた「有舌尖頭器石器群」などとして、細石刃・細石刃核を伴わない段階が設定されたが（千葉 1985、横山 1986 など）、後に有茎尖頭器を忍路子型や広郷型の細石刃核をもつ細石刃石器群の一構成要素として捉え、有茎尖頭器単独の段階の存在を疑問視する案も提示された（寺崎 1999、2006、山田 2006）。同様な資料群を対象に異なる結果が導かれた背景には、本州島と整合的な体系を追求する立場と、逆に北海道独自の編年を意図的に追求する立場の違いを見て取れる。

北海道独自の編年案の提示は結果として、石器群が北海道内で独自な展開を示した時期と逆に本州島と広く連動した時期とを、それぞれ解明しつつある。見通しとしてはステージ3の台形様石器群の一部は連動した可能性があり、LGM を前後するナイフ形石器群では別個となる。細石刃石器群は変遷順序こそ不明ながら札滑型の石器群がきわめて高い共通性で連動し、幌加型と白滝型は弱く連動する。それ以後ステージ1の開始に向かう時期には、有茎尖頭器・大形尖頭器・石斧・土器の参入や、細石刃の消滅など別個となる。共通する時期について北海道と本州島との具体的な比較研究が可能であり、今後積極的に追求する必要があると考える。その実践の試みとして別稿を用意している（長沼投稿中）。

4．同時異相をめぐる問題

地学では通常、古い年代の層が下に新しい年代の層は上に堆積すると理解する。しかし時に、近接した場所で同時に形成された堆積物が異なる層相を示すことも明晰に理解されており、同時異相とよばれる。これと似た現象は考古資料にもある。北海道では本州島との連動が再び途切れる後半期細石刃石器群で、せまい数値年代（放射性炭素年代）幅の中に、複数の異なる石器群が共存した可能性が指摘されている（寺崎 2006、山田 2006 など）。有茎尖頭器と忍路子型・広郷型・白滝型の細石刃核が消滅した後に、小形舟底形石器と大形両面調整尖頭器の段階つまり細石刃石器群ではない段階を想定する案（寺崎）と、それらすべてが細石刃石器群の同時異相である可能性も排除しない案（山田）の違いがある。むろん数値年代の信頼性の問題もある。本州島でも数値年代の蓄積が少ない時点では、ナイフ形石器の消滅から土器の出現にいたる旧石器の終末が「短期間のめまぐるしい変遷」と理解されていたが、やがて年代測定例の蓄積で従来の想定よりも長

い時間幅が明らかになった経緯がある。北海道の現状もこれと同様、年代測定試料の堆積学的文脈に信頼性のある例の蓄積によって解消される可能性もある。しかし一方でアムール下流域や南関東でも、やはりステージ2の終末段階に相当する年代に、多様な石器群が短時間にモザイク的に展開した可能性がある。同時異相はステージ2最終末の人類活動を研究する上で、キーワードの一つになることも考えられる。

はたして考古資料の同時異相はどのように生成したのか。高緯度で寒冷な北海道では、旧石器遺跡も本州とは異なる自然的形成過程上の特性を持つ（出穂・赤井 2005）。本来は短いながらも時間差をもって形成された諸遺跡であっても、凍結融解擾乱が強くあるいは長期間にわたって生じた場合や、地学的に分離できない堆積物中に複数の異なる石器群が包蔵される場合には、それらの分離は困難となる。この事情にくわえて実際に遺跡での人間活動の差異が同時異相であった場合、層位と型式学の併用による編年という本州的（さらに言えば南関東的）な研究方法の射程外となる。先に指摘した自然環境への人類の適応行動が北海道と本州とで異なった可能性にくわえて、寒冷地ゆえの遺跡形成過程上の特性もまた、北海道と本州の比較を実践する上で立ちはだかる壁となる。

この問題を対象化したのが常呂パターン仮説である（加藤・桑原 1969、加藤 1970、山田 2005）。各遺跡間の同時性をいかに証明するかとの批判があるが、常呂パターン仮説はそのような問いとは異なる射程をもつ。型式学による編年では人工遺物の型式（組成も含む）を可能な限り厳密に（＝せまく）とらえることで、その典型例からの変異をできるだけ多く抽出し、これらを典型例に近いものから遠い順に並べて、この序列を編年的前後関係として理解する。この思考では、実際には同時に複数の異なる姿が同時異相で生成していても、典型から異なる限りは時間が異なるとの誤った理解を導く[4]。先述した形態形成因子の多様性と不確定性に加えてこの点でも、遺跡間の厳密な同時性を石器の型式学や組成による編年の方法で証明することには限界がある。そこで型式学編年以外の手法で複数遺跡間の同時性を導くには、やはり信頼できる堆積条件下での数値年代が重要となろう。ただしこの場合、相対的に幅広い時間幅を同時と捉えることになる。そもそも細分を目指す人工遺物の編年研究が刻む時間幅とは、いかなる性質の年代幅なのであろうか。また研究史上は細石刃核型式や有茎尖頭器など指標的とされる特定の器種の特別視が主体であったが、彫器や掻器など、異なる石器群に共通して多数組成する器種の定量的な分析の重要性も指摘されている（山原 2003 など）。いずれにせよ考古学の同時異相現象に切り込むには、極度に厳密な同時性を追及するあまり議論が立ち行かなくなるよりも、むしろ幅広い時間幅を同時と捉える遠近法で解析できる課題を設定することが、生産的な議論を拓くと考える。

5．おわりに

同じ日本国内とする本州と北海道との現代社会上の位置関係から、旧石器時代の研究では、本州島の石器群を北海道からの経路で説明する論法や、逆に本州島の編年に整合させる形で北海道の資料を配列する議論が積み重ねられてきた。しかし狩猟採集社会では自然環境への適応戦略が異なった可能性や、寒冷地の自然擾乱や考古資料の同時異相など遺跡形成過程の相違のため、北海道と本州島との比較には困難が伴うのが実際である。北海道の実態に即した編年が構築されることで、逆に北海道と本州島で共通・連動する時期と、別個に独立して展開する時期の違いが明らかになりつつある。連動する時期と個別に進む時期それぞれの背景を追求した上での比較研究が今後の課題であると考える。なお小稿は短時間で短文を用意したので意をつくせていない。小稿で言及した個別の論点について、より詳細に論じる機会を改めて設けたい。

註

1）更新世＝旧石器時代の研究では海面低下時の地形を想定し、文脈に応じて本州以南の島嶼部を一括して本州島と表記する。なお更新世終末＝完新世開始の定義と模式層序は定まっていないが、AD2000 年を基準とする暦年較正年代で 11,734 年前との提案があるという（熊井 2006）。本州島では縄文早期撚糸紋土器群が出現している（工藤 2005）。

2）石刃技術は本州島の内部で段階的に確立した可能性も指摘されている（国武 2005）。

3）同じことは琉球、台湾、朝鮮、満州にも相当するが、台湾、朝鮮、満州は太平洋戦争終結後に「日本国ではなくなった」ため、現在では近代日本が拡張を試みた領土のうち、相対的に初期に獲得した北海道と琉球のみが引き続き「日本考古学」の内部とされている。なお、このような経緯が旧石器時代当時の実態と無縁であることはいうまでもない。

4）湧別技法をめぐる論争は、この手の議論の代表例である。一方の立場では型式学の原理により湧別技法の「典型例」を可能な限りせまくとらえ、典型から外れる例は時期差を暗示する別型式として析出しようとした（大塚 1968、千葉 1993 など）。他方は、個別石器の違いは共時的な技術基盤から派生した変異であり、それら個別変異の振舞いから技術の多様性や構造的性質を捉えようと考えた（筑波大学グループ 1990、木村 1995 など）。

引用文献

安斎正人 2003『旧石器社会の構造変動』、同成社。

出穂雅実・赤井文人 2005「北海道の旧石器編年―遺跡形成過程論とジオアーケオロジーの適用―」『旧石器研究』1、39-55。

上野秀一・加藤稔 1973「東北地方の細石刃技術とその北海道との関連について」『北海道考古学』9、25-49。

大井晴男 1965「日本の石刃石器群 “Blade Industry” について」『物質文化』5、1-13。

大塚和義 1968「本州における湧別技法の一考察」『信濃』20（4）、1-10。

加藤晋平 1970「先土器時代の歴史性と地域性」『郷土史研究講座 I 考古学と地域性』、朝倉書店、58-92。

加藤晋平・桑原　護 1969『中本遺跡―北海道先土器遺跡の発掘報告―』、永立出版。

加藤博文 1997「技術体系とその多様性の解釈：細石刃石器群の事例にて」『筑波大学先史学・考古学研究』8、1-29。

木村英明 1995「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学』31、3-63。

工藤雄一郎 2005「本州島東半部における更新世終末期の考古学的編年と環境史との時間的対応関係」『第四紀研究』44（1）、51-64。

国武貞克 2005「後期旧石器時代前半期の居住行動の変遷と技術構造の変容」『物質文化』78、1-15。

熊井久雄 2006「最近の第四紀年代層序問題」『旧石器研究』2、81-92。

栗島義明 1993「湧別技法の波及」『土曜考古』17、1-37。

栗島義明 1999「神子柴文化の系統問題―ニーナ論文によせて―」『土曜考古』23、157-170。

佐藤宏之 2003「北海道の後期旧石器時代前半期の様相―細石刃文化期以前の石器群―」『古代文化』55（4）、3-16。

須藤隆司 2006「両面調整技術構造による石槍の変動」『石器文化研究』13、31-54。

芹沢長介 1961「日本における細石器文化」『歴史教育』9（3）、10-16。

千葉英一 1985「日本の旧石器―第 3 回北海道（3）―」『考古学ジャーナル』249、28-31。

千葉英一 1993「新道 4 遺跡における細石刃石器群の検討―美利河技法の成立―」『先史学と関連科学』、吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会、5-23。

筑波大学遠間資料研究グループ編 1990『湧別川―遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録―』、遠軽町教育委員会。

寺崎康史 1999「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』8、71-88。

寺崎康史 2006「北海道地方の地域編年」安斎正人・佐藤宏之編『旧石器時代の地域編年的研究』同成社、275-314。

長沼正樹（投稿中）「両面石器リダクションの事例（1）―札滑型細石刃核に関連する石器群―」『論集忍路子』Ⅱ、忍路子研究会。

三宅徹也ほか 1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、青森県立郷土館。

山田　哲 2005「常呂パターン仮説に関する一考察」『北海道旧石器文化研究』10、1-12。

山田　哲 2006『北海道における細石刃石器群の研究』、六一書房。

山原敏郎 2003「石器変形論からみた周縁加工左刃彫器群の形態認識について」『古代文化』55（4）、32-45。

山内清男・佐藤達夫 1962「縄紋土器の古さ」『科学読売』12、84-88。

横山英介 1986「北海道の有舌尖頭器」『考古学ジャーナル』258、6-10。

北方圏の考古学 I

Archaeology in Northern Region, I

発　行

平成 19(2007)年 4 月 30 日

編　集

加藤　博文・髙倉　　純

発 行 元

北海道大学大学院文学研究科

〒 060-0810　札幌市北区北 10 条西 7 丁目

印　刷

株式会社 アイワード